

今回は、「おさしづ改修版」第1巻の「本席・家族」の「おさしづ」について、「道」という言葉が用いられる用例を整理したい。「本席・家族」として整理しているのは、飯降伊蔵本席、そして、その家族の身上や事情について伺われた「おさしづ」である。第1巻に90件あり、その「おさしづ」において「道」が3回以上用いられているのが30件ある。以下では、その特徴を確認するために、3回以上「道」が用いられている「おさしづ」を取り挙げて検討したい。

教会本部の引き移し

「本席・家族」の「おさしづ」の中で3回以上「道」が用いられている30件のうち、3件は飯降さと（本席夫人）についてのもので、その他はすべて本席身上伺である。明治20年には、本席やその家族について伺った「おさしづ」はほとんどなく、「道」が3回以上用いられているものは一つもない。ところが、明治21年4月に東京府において教会本部設置が認可された翌月から、断続的に本席身上伺があり、その「おさしづ」にあって「道」が頻繁に用いられている。

明治21年5月6日（本席腹より胸の下へ差し込み胸つかえるに付御伺）
成程の道を通り、世界道通り難くいであろう。連れて通れる。（中略）何でも二つ定まり、この理をよう記し、世界の道印無い道、神の道五十年道分かれば、成程世界速やか。道何処にある。怖わき危なきあるまい。

明治21年6月5日（本席身上おさしづ）
神一条の道である。早く急げ、取り掛かれ。／神一条ならば、計り難く一つの道、これが十分確かな道。思案第一ならん。いつ〜まで見通がしはならんという。いかなる処、人間一条理では、計り難ない、危ぶいものである。早く取り替え〜、神一条々々々。

明治21年6月27日（本席御障りに付伺）
神一条のこれから事情運べ。ことなす理を振り替わりてある。一寸細々の道を許してある。これまで通り替わりてある。早く理を運び替え。

明治21年7月2日（本席腹下に付伺／教会本部をぢばへ引移りの事を押して願）
ぢばに一つの理があればこそ、世界は治まる。ぢばがありて、世界治まる。（中略）どんな道もある。心胆心澄ます誠の道があれば早く〜。

明治21年7月3日（本席の御障りに付おさしづ）
先ず〜このぢば・かんろうだい一つ、何でも彼でも運ばにゃならん。どんな道、世界の道、ほんの気休めである。発端の道、何か急いで取り掛かれ〜。

ここに挙げた最初の「おさしづ」は、「東京で公認になった教会本部を、お地場に引移すよとの神意を伝えられている」（天理教主査室編『おさしづ抄——附註釋』天理教道友社、1951年）と説明されている。この「おさしづ」から、ここに挙げたすべての「おさしづ」において教会本部をおぢばへ引き移すよと、本席身上伺を通して繰り返し論がされている（前掲『おさしづ抄一』参照）。その中では、「世界（の）道」と「神（一条）の道」について説かれている。「世界（の）道」は、「印無

い道」であり、「一寸細々の道を許してある」ものの、それは「ほんの気休め」であると言われ、端的には教会本部設置のことを指していると考えられる。それに対して、「神（一条）の道」は、教祖の「五十年」の道であって、「これが十分確かな道」であり、それはまた、心を澄まして通る「誠の道」であると言われている。そうして、「神（一条）の道」に「取り掛かれ」「早く取り替え」「早く理を運び替え」などという言葉で、教会本部の引き移しを急ぎ込まれている。ただし、「神（一条）の道」を通るように説かれるからといって、「世界（の）道」を排せよと仰っているわけではない。最初に挙げた「おさしづ」に、「成程の道を通り、世界道通り難くいであろう。連れて通れる。」とあるように、神一条の「成程の道」を行けば、「世界道」は通りにくいと思うであろうが、神が「連れて通れる」、あるいは、「神の道」が分かれば「成程世界速やか」と説かれ、「神（一条）の道」を通ることによって「世界（の）道」も通ることができるという関係を見ることができる。

「往還道通り難くい」

その後も、「神（一条）の道」と「世界の道」とを用いた論しはしばしば見られる。それは、「本席身上伺は、ほとんど刻限話と同様の位置を占めるといえる」（『改訂天理教事典』332頁）と言われることから推察されるように、「刻限」の「おさしづ」において確認したのと同様であるが、ここで気づいたこととして、「往還道」の用例について簡単に記しておきたい。

明治22年7月26日（本席身上御障りに付願）

道の順序〜言い掛ける〜。／身の内手入れ〜、知らさんとする。これ往還道通り難くい。どういふもので。さあ〜身の内往還通り難くい、往還道通り難くい。

明治22年11月2日（本席身上障り願）

これまでというものは、細い道を通して来てあるで。細い道連れて通った。どうもならんから、世界一つの理によって、一寸世界往還道を付け掛けたで。そこで皆々心許す。往還道通すと、どんと油断してどうもならん。

明治23年2月6日（本席身上俄に腹突張り御障りに付願）

これまで細道随分通れる、往還道は通り難くい。往還道は世界である。細道が通りようて往還通り難くい。何でやと思う。細道一人の道、往還世界の道。

「本席・家族」の「おさしづ」の中で、「往還道」という言葉が用いられるのは、明治22年7月26日が最初で、あと2件の「おさしづ」に見られるだけであるが、その中に多くの「往還道」の用例がある。そこで「往還道通り難くい」と言われている。この言葉は「本席・家族」以外の「おさしづ」に目を向けてみると、第1巻の中では、明治22年中頃から明治23年に集中している。この年代は、各地において天理教の教会が出来て、だんだんと教会組織が形成されてくる頃であるが、それについて「一寸世界往還道を付け掛けた」と言われている。しかし「往還道通すと、どんと油断してどうもならん」と戒められ、「細道随分通れる」「細道一人の道」と論される。教会組織が形成されてくるが、一人ひとりが心を定めて歩むことを促されている。